

## 人生の二分の一

わたしは全障研とほぼ同い年の54歳、重度の知的障害と自閉症を併せ持つ息子祐希は27歳です。そう、わたしは人生の半分を障害児の保護者として歩んできたわけです。これまでの27年の来し方を振り返る時、広島の大切な宝物である「療育」が土台となり、今の仕事や活動を形作ってきたと実感しています。

1996年に予定日より早く未熟児として生まれた祐希はすぐに新生児集中治療室に入りました。身体面での成長ばかり気にしていましたが、生後半年もすると、さまざま不安が押し寄せてきました。よもや「障害」とは考えもしなかつたけれど、インクの一滴一滴が染みのように広がっていくかのように、心が黒で埋め尽くされていく毎日でした。

他県で障害関係の職についている親戚から「心配ごとなら母子手帳に書いてある児童総合相談センターに電話したらいい」と、シンブルに助言してもらえてほっとしました。

今、母子手帳を見返すと、1歳半健診の項目には笑顔マークのついた「順調です！」のスタンプの脇に「言葉は様子を見てください」の記載がありました。なんだかなあ：様子を見ていても、しゃべれるようになるとは到底思えず、2歳を前に児童総合相談セン

の水銀を除去するワクチンが自閉症に有効だとか、○○メソッドが健常児に追いつく、鍼灸で自閉症が改善できるとかいろんな風説が流布されていました。生活をシステム化する療法的なものもありました。

いろいろと喧伝されていましたが、どれもこれも意外に響いてこなかったのです。ぼんやりとした違和感しか湧いてこなかつたであります。「治す」ことをいい意味で吹っ切れた風説でした。風説さまざまです、今となつては。治しても（治らんけど）、人として育ち育てられる環境、条件、社会どれ一つが欠けても豊かな成長につながらないと思えました。入園1年目でしたが、広島の障害児療育を充実させる会（現・広島の障害児療育・教育を充実させる会 略称・充実させる会）の研修で北部療育センターの主任保育士が講師としてお話ししてくださいました。療育とは達とは何か、広島の療育のあゆみ、大阪のとりくみや各地の課題など多岐にわたる内容に運動と学習の重要さに気づかされました。

お話を聞くまでわたしが勘違いをしていました。療育や障害施策などはユニバーサルデザインというか全国どこに住んでも享受できる素晴らしい制度を国がつくってくれたんだと（己の無知を恥じます）。実際には自治体、なんなら首長の裁量・考え方ひとつで



祐希さん

# 仲間がいっぱい ひろしまの療育

この連載では、全障研広島県支部広島乳幼児サークルのメンバーが、乳幼児期の療育で大切にしてきたこと、保護者と共に運動してきたことなど、ひろしまの療育についてお伝えします。



筆者左。ワークきらぼしの仲間と

## 第4回 保護者として、 一生活者としてのわたし

ワークきらぼし 真田友恵

### 運動との出会い

外来教室の先生が「今大変な状況になつるんよ」とそつと教えてくれました。いわゆる1997年の広島市の民間委託の問題だったのです。システムすらよくわかつていなにもかかわらず、「障害児の行き場がなくなり、祐希はまだ障害があるつて決まつたわけじゃないけど」と思いながら、署名を集め始めました。直接（組織的な）運動に参加していなかつたので、その後はどうなつたか知らないままでした。

外来教室を経て育成園（知的障害児通園施設）に入園しました。障害名 자체は受け入れたつもりでも、まだわたし自身は障害を治すために通つている意識がありました。インターネットが発達していなかつた当時でも体内

どうにでもなる。その証左が広島市だつたのに、つながつていなかつたのです。研修の後、「そうこうしよつても毎年何人も障害児は生まれてくるけんね」。ある先輩保護者がつぶやいたことを鮮明に覚えていました。わたしたちは今のわが子も大切だけれど、これからの中にもこの療育システムをつないでいく役割があるんだと新しい視座を得ました。

保護者会では、先輩保護者が精力的に運動された経緯を聞く機会もありました。それで

外來教室の時の署名が「あれだつたのか」と得心がいきました。結局、委託にはなつたけれど、勝ち得たものもあつたと知りました。

### 全障研と学びの場づくり

祐希は地元の小中の支援学級、特別支援学校高等部に通いました。夏の恒例行事で思い出されるのは、仲間とともに全障研全国大会に子連れで参加したこと。子どもは保育に預け、保護者は学習です。わたしも一度レポート発表をしたことがあります。「子どもは絵カードで育つのか？」といつた刺激的な投げかけで、自由闊達な意見が交わされました。保育も祐希の成長の一助となつたと思います。見知らぬ土地で見知らぬ人と過ごすことはストレスもあつたでしょうが、公共交通機関で移動する経験、夜の居酒屋の楽しみ（それは

ターの門をくぐつたのでした。

小児科医の診察を経て、外来教室に通い始めるようになりました。明るい笑顔で温かく迎え入れてくださった外来教室の先生方の姿に「ここにがんばつて通つて早く普通の子に追いつくぞ」と心密かに意気込んでいたわたし。今なら、その当時の自分を後ろから蹴り上げたくなります。外来教室では、遊びを足がかりに共感や他者とのつながりをつくつていくことの大切さを徐々に理解しました。